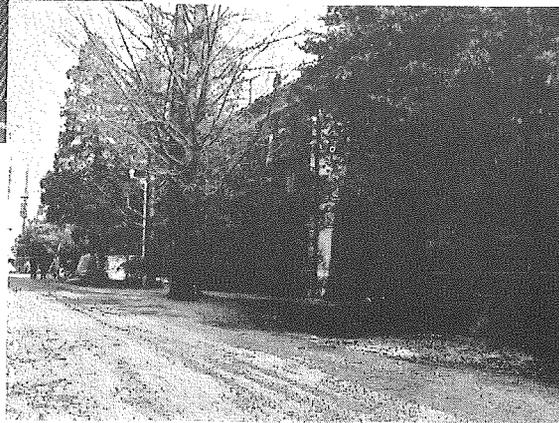
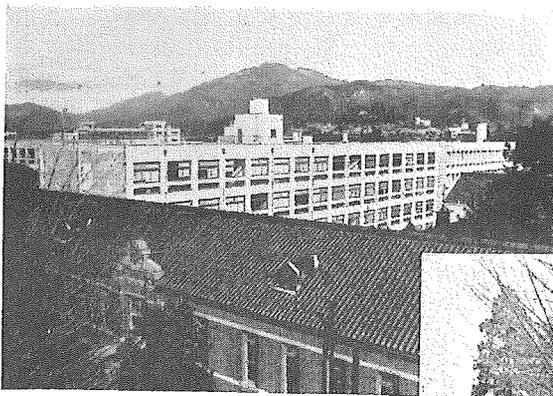


# 洛友会々報

京都市左京区吉田本町  
京都大学工学部  
電気工学科教室内  
洛友会

電気工学科教室正門、および正門左側



## 第十四回

### 洛友会総会の記

五月十六日(日) 午前十一時より  
京都ホテルにおいて第十四回洛友会  
総会が盛大に催された。

近藤幹事司会の下に、鳥養会長は  
学士院授賞式に参列のため上京中  
につき、山村副会長議長席につき経過  
報告をもって挨拶に代え引つづいて  
昭和三十九年度収支決算および昭和  
四十年事業計画画に収支予算をそ  
れぞれ付議し、満場拍手裡に承認可  
決された。

ついで、大宴会場にて懇親会にう  
つり、お互に健康を祝しつつ歓談に  
時を移した。

たまたま国際会議に出席のため来  
日された台湾電力公司副総裁朱江准  
氏が列席され、一席の挨拶があり一  
段と賑いを呈した。

宴酬にして、先斗町美妓連の小唄  
さつき二題、潮来の舞踊と、舞妓連  
の春雨、祇園小唄、鴨川小唄の舞踊  
は一段の興をそえた。

終りに、大先輩小田嶋修三氏の発  
声により洛友会萬歳を三唱して散会  
した。時に午後三時。

出席者 ○印夫人同伴

- 小田嶋修三 山岡 景範
- 道田 貞治 堀 鹿造
- 岡本 越 上林 一雄
- 光野 重威 山村 忠行
- 松田長三郎 ○乙葉 真一
- 阿部 清 間崎 龍夫
- 宮崎佐が枝 羽村二喜男
- 岐美 忠雄 奥谷 久彦

- |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 渋谷 励三 | 口羽 玉人 | 川端 昭  | 藤田 惟之 |
| 西枝 卓次 | 大島 広定 | 寺田 真  | 杉田 繁治 |
| 熊谷 三郎 | 林 重憲  | 坂田 光生 | 真弓 和昭 |
| 小池 恒久 | 木村 亨介 | 中村 英士 | 野田 伸雄 |
| 鈴木 亮三 | 上林 明  | 田淵 義彦 | 平嶋 正芳 |
| 和田 正弘 | 加茂 忠恒 | 篠原 進  | 景山 輝久 |
| 河合 次男 | 伊藤 忠雄 | 山口 晋  | 小淵 洋一 |
| 古田 久一 | 上西 亮二 | 中堀 一郎 | 徳田 政昭 |
| 桂田 徳勝 | 大西 正一 | 辻 俊彦  | 橋本進一郎 |
| 浅田 英直 | 青山 正次 | 西野 勲  | 浅野 勝昭 |
| 松岡 重一 | 善積 俊一 | 荒木 和男 | 鈴木 洋  |
| 和田 昌博 | 永田 良孝 | 佐野 守彦 | 羽根田博正 |
| 岩井 録一 | 大場 俊三 | 片岡 靖夫 | 平松 幸生 |
| 林 千博  | 喜田村善一 | 乾 敏明  | 佐藤 毅夫 |
| 石川 弘文 | 高橋 光雄 | 立石 享三 | 新宅 圭一 |
| 中堀 孝志 | 植田 正一 | 小出 博一 | 上田徳次郎 |
| 塩沢 弘  | 北村 芳雄 | 谷口 良吉 | 井上佐一郎 |
| 香山日出雄 | 藤本 悟郎 | 松田 代造 | 井口 誠一 |
| 本郷 弼良 | 萩野 和夫 | 武石 萬一 | 酒井次三郎 |
| 日高 安壯 | 林 潔   | 柴田 幸男 | 河合 濟一 |
| 佐野 一雄 | 山田 昇  | 高野市太郎 | 山口 敬二 |
| 高木 正  | 有馬 敏彦 | 岩本 國三 | 藤村 俊一 |
| 田村 誠一 | 鈴木 重治 |       |       |
| 大谷 泰之 | 田中 哲郎 |       |       |
| 小南 光夫 | 板倉 清保 |       |       |
| 大塚 恭二 | 永安 弘  |       |       |
| 西村正太郎 | 野村 勇  |       |       |
| 浮出 勇  | 豊田 茂雄 |       |       |
| 近藤 文治 | 吉住永三郎 |       |       |
| 佐野 博也 | 大槻善三郎 |       |       |
| 室賀 淳  | 桑原 道義 |       |       |
| 森島 省三 | 宇野 敏一 |       |       |
| 藤島 啓一 | 藤村 勉  |       |       |
| 若林 二郎 | 木嶋 昭  |       |       |
| 林 宗明  | 東松 孝臣 |       |       |
| 坂谷 良平 | 坂和 愛幸 |       |       |

電気講習所

立石 享三 新宅 圭一  
 小出 博一 上田徳次郎  
 谷口 良吉 井上佐一郎  
 松田 代造 井口 誠一  
 武石 萬一 酒井次三郎  
 柴田 幸男 河合 濟一  
 高野市太郎 山口 敬二  
 岩本 國三 藤村 俊一

計一三九名

### 洛友会関西支部総会記事

本支部総会は五月十六日(日)京  
都ホテルにおいて本部総会に先だっ  
て午前十一時十五分より開催し、  
近藤幹事司会の下に、昭和三十九年  
度決算および昭和四十年事業計画  
画に予算を承認可決した。

### 会費徴収について

本会報には振替用紙が封入してあり  
ますからお忘れなくお振込下さい。

昭和39年度収支決算

収入の部 昭和39年4月1日より  
昭和40年3月31日まで

科 目	決 算 額	予 算 額
会 費	1,020,100	1,100,000
本年度分	720,200	800,000
過年度分	299,900	300,000
電気講習所会費	149,200	150,000
預 金 利 子	128,675	110,000
雑 収 入	22,590	10,000
繰 越 金	2,902,578	2,902,578
合 計	4,223,143	4,272,579

支出の部

科 目	決 算 額	予 算 額
刊 行 物 費	682,205	880,000
名簿編集費	26,175	30,000
同 印刷費	410,000	450,000
同 発送費	146,850	200,000
会報編集費	5,000	15,000
同 印刷費	33,000	62,000
同 発送費	61,180	123,000
諸 費	546,489	500,000
側 品 費	6,200	15,000
通 信 費	5,835	5,000
会 合 費	7,464	20,000
総 会 費	103,270	120,000
集 金 費	82,720	90,000
総 掛 費	196,000	100,000
旅 費	145,000	150,000
臨 時 費	50,000	40,000
懇話会補助	50,000	40,000
予 備 費	2,944,449	2,852,578
繰 越 金	2,944,449	2,852,578
合 計	4,223,143	4,272,578

昭和40年度収支予算

収入の部 昭和40年4月1日より  
昭和41年3月31日まで

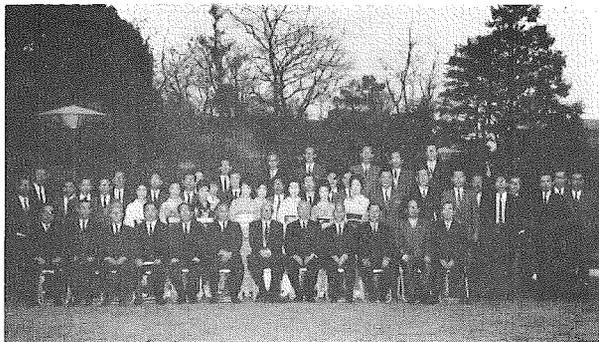
科 目	予 算 額	前年度決算額
会 費	1,100,000	1,020,100
本年度分	800,000	720,200
過年度分	300,000	299,900
電気講習所会費	150,000	149,200
預 金 利 子	130,000	128,675
雑 収 入	495,551	22,590
繰 越 金	2,944,449	2,902,578
合 計	4,820,000	4,223,143

支出の部

科 目	予 算 額	前年度決算額
刊 行 物 費	910,000	682,205
名簿編集費	30,000	26,175
同 印刷費	480,000	410,000
同 発送費	200,000	146,850
会報編集費	15,000	5,000
同 印刷費	62,000	33,000
同 発送費	123,000	61,180
諸 費	600,000	546,489
備 品 費	15,000	6,200
通 信 費	5,000	5,835
会 合 費	20,000	7,464
総 会 費	200,000	103,270
集 金 費	90,000	82,720
総 掛 費	120,000	196,000
旅 費	150,000	145,000
臨 時 費	50,000	50,000
懇話会補助	50,000	50,000
予 備 費	3,350,000	2,944,449
繰 越 金	3,350,000	2,944,449
合 計	4,820,000	4,223,143

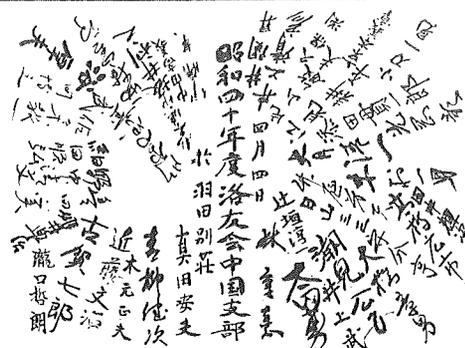
預金および現金

信託預金	1,634,634	三菱信託銀行, 住友信託銀行各京都支店
定期預金	1,000,000	第一銀行百万遍支店, 住友銀行京都支店
普通預金	305,555	同 上, 同 上
当座預金	1,200	第一銀行百万遍支店
振替残金	710	
現 金	2,300	
合 計	2,944,449	



洛友会中国支部総会の記  
四月二十五日、電気四学会連合大会が十数年ぶりに広島市で開催され、御出席のため御来広になった林(重)、近藤、坂井、桑原の諸先生をお迎えし、四月四日午後五時半より広島市内羽田別荘において四十年度洛友会中国支部総会を開催した。今回は前記四学会連合大会に御出席された各地支部の方七名の特別参加もあり、会するもの五十名におよぶ盛会で、総会に花を添えていただきました。  
真田支部長の挨拶にはじまり、三十九年度の会計報告、行事報告、四十年度役員改選に続いて、林先生からスライドで懐かしい教室の現状を目の前に見ながら御説明があり、引続いて懇親会に移った。

春とはいえ、また肌寒い風の吹く中でのガーデンパーティーではあったが、林先生を始めとし特別参加の皆様の御挨拶などお喜びませ、会員の歓談盛んになり、自慢のかくし芸がつぎつぎと披露され、いつはてるともいれず、和気あいあいの中に盛會裡に会を閉じた。



国民外交の一こま

昭五 伊藤 忠雄

新緑が目にしみる五月十六日、洛友会総会が、京都ホテルで開かれた。昭和五年卒業の連中の六名がこの会に参加した。

そのなかで、台湾電力公司協理の朱君が、たまたま、日本訪問の最中だったので、ぜひ旅程を総会に出席できるように組んでおいて欲しいと頼んでおいたせいもある、めずらしく卒業卅五年振りに、同窓会に出席された。

同窓会は、この珍客に一席のスピーチを乞い、朱君もこれに応じられて、流暢な日本語で述べられた。まことに楽しい、国境をこえた日華風景がかもしだされた訳。

とりわけ、朱君は次のような印象的な言葉を残して、再会を約し、翌日京都を去られた。台湾の若い人達は、日本を憧憬していることは事実だが、現実は大抵アメリカに行ってしまう。それは、ひじょうに悲しいことであと十年もすれば、兩國の親善の「きずな」が断ち切られてしまうような気がしてならない。

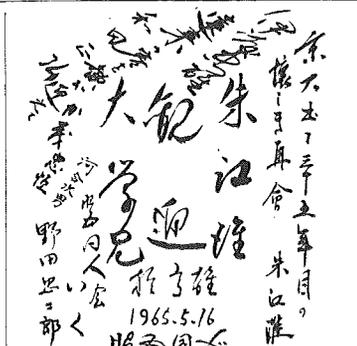
昔は、京都大学に相当の台湾人が入学していたが、今は三名位。私は日本を理解させるために、年々技術の研修生を派遣し、そしてそれを増やすことに努力している。今年は一四八名を確定し、目下日本で研修中である。

日本外交は、中共と台湾と両方を考えるから、台湾にもご遠慮勝ちになる。これは十年さきをみれば、非常に淋しいことである。どうか、十年先を考えて、台湾の若者を即刻引きつけて欲しい。そういう国民外交を推進させるように洛友会の方々に

お伝えして欲しい。

私は、朱君の言葉に同調したい。私も国民外交の手始めとして沖繩の学生を、家に同居させて世話しているのだが、本年は台湾の人を二名位呼んでもよいし、学資がないとなら

ば、資金の援助も惜しまないつもりだから、ぜひ推せんして欲しい。これが実現すれば、君が日本へ来た目的が一そう本意義になる訳だ。と答えておいた。一行六名の小さいクラス会であったが、昔語り時代のすぎるのを忘れ、夕やみが迫る六時半ごろ、高雄を去った。寄せ書は、そのときのものである。



加藤信義先生

七周忌追憶の会

昭和四十年四月一日

赤坂吉村にて

加藤信義先生が大阪でお亡くなりになったのは、ほんの二三年前の出来事のように思われますが、既に満六年を経過し、去る四月一日が七周忌に当たりました。「光陰矢の如し」全く月日の経つのは速いのに驚く次第です。今年の三月、東京洛友会支部幹事会で、乙葉氏の提案により、加藤信義先生の七周忌の集いを洛友会東京支部有志の間でもつたらとのことで、急にこの集りの計画に取りかかった次第ですが、何分にも時間的にさし迫っていたこと、場所が

適当なところが取れなかったことで、御夢いを出す範囲を必要以上に限定しなければならなかったことは返す返すも残念に思います。取りあえず、加先生の御卒業の大正六七年の東京在住の方々を中心に昭和初期迄に御卒業になり、且つ加藤先生と御関係の深かった人々、数十人に絞ったわけでありました。生前加藤先生との御関係を充分に知っている人もなく、案内状発送について、当然御案内すべき人が洩れていたことと存じますが、上に述べたような準備期間、其の他の不十分の点にかこつけて、御許し願いたいと存ずる次第で御座います。

東京に於けるこの集いにつきましては、洛友会本部の山村幹事、大学の大家教授に事前連絡を致しましたところ、御遺族の方にも御連絡を願

い、大谷教授からは加藤先生のカラー写真を御遺族の方から御借りして送っていただきました。会場は赤坂の「吉村」という料亭で行いましたが、床の間に加藤先生のカラー写真を飾りましたところ生前の加藤先生の前で会合が開かれているような気分を醸成いたしました。甚だ有効でした。大谷先生に厚く御礼申し上げます。

当日参集された方々は左の通りでした。



- 山本 三郎 交川 有塩津 均
  - 大島 文平 安達 遠藤田 真
  - 吉岡 俊男 平野 彰松尾 三郎
  - 高崎 勲 山村 龍男
- (以上二十三名)

会合は五時に参集となっておりましたが五時半に大部分の方が参集され開会、加藤先生の御写真に黙乙禱の後、乙葉先輩から本日の会合についての御挨拶があり、石川幹事の御挨拶にひきつづいて、参集者の殆んど全員の方々から生前の加藤先生の思い出話が、テーブルスピーチの形で行われました。

生前の加藤先生の幾多のエピソードに会場は議論風発、床の間の加藤先生の写真も苦笑されたように思われました。一同加藤先生の御冥福を祈りつつ八時半閉会。

(昭四〇、四、二、松尾記)

- 乙葉 真一 高見 祥平
- 榊原 吉三 土方鹿之助
- 大内 誠三 東 義胤
- 小森 修二 三浦 倫義
- 高島 正一 一本松珠璣
- 山崎 善雄 石川 辰雄

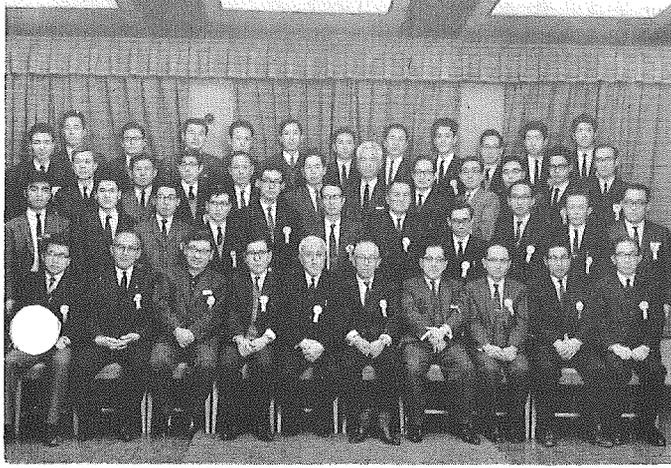
電々洛友会例会の記

電々洛友会は、日本電信電話公社、在職中の洛友会々員と、かつて通信省、電々公社に籍をおいたことのある諸先輩とで組織されており、年に一回例会を開いている。

現会員は三十九年十二月現在で先輩、大森白山製作所長(明治四十四年卒)以下三十六名、現役、佐々木総務理事兼技師長(昭和十年卒)以下六十六名(うち通研二十八名)で余り多数のため、従来は本社関係と通研関係を別にして開くことが多かったが、今回は幸に高田昇平氏(昭和十年卒)のご厚志で東京日白クラブをお借りし十二月二十三日(水)夜、同会の例会を行った。

出席者は長島正隆氏(大正三年卒)以下先輩十三名、現役三十一名という盛会で喜田村氏は大阪からはるばるかけつけられた。会はパーティ形式で行なわれたが、久しぶりの再会を喜ぶ姿があちこちに現れ、先輩、現役、新入社生の和やかなテールブルスピーチもあり、一日早いクリスマス・イブはいつ果てるとも知れなかった。最後に記念撮影をし、洛友会の発展と各自の健康を祈って乾杯し解散した。

出席者(写真参照)



最前列右から 岩元 巖、塩沢 弘、喜田村善一、小野恒造、長島正隆、大内誠三、小菅菊夫、鈴木敬吉、佐々木卓夫、芦田俊夫

二列目右から 美間敬之、竹嶋正巳、村田 孟、正木知巳、平田 穰、角田和男、篠原 進、根矢一三、脇坂隆夫、小泉洋次、黒瀬泰三、三列目右から 岩増弘三、田宮忠雄、清水通隆、高橋碩男、宗雪満夫、山本幹次、小原 猛、伊藤義一、桜井繁樹、花木充夫、佐藤貞成、竹原 照

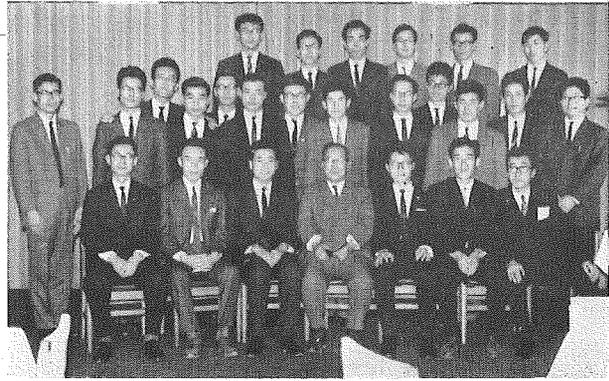
最前列右から 中村英毅、内田直也、筑後道夫、若本孝雄、田端 実、桑原耕平、久民 実、近藤貞吉、伊吹公夫、三好良一、安達哲夫 (美間記)

昭和十六年三月卒業生 クラス会と予告

新緑に間もない四月廿三日夕べ神綱電機の秋田君が所用で上京するのを機会に石井君(富士電)が連絡役を買って出て急遽集ることになった。会場は昔の敬称(今日も通用)に従えば岡本大尉の御世話で、三菱電機の高輪荘、極めて急な計画にしては誠に好成绩で、思いもかけず伊勢から藤田君も出席、また日清製粉名古屋工場長に転出中の副島君も名古屋から、其の外に武田正三、王井、坪井、平野、吉田、田中以上十一名、参集、この他にも三、四名出席予定者があったが、当日急用で欠席されたのは残念であった。

さすがに、卒業後二十年以上も経つと、社長あり重役あり部長ありで意気けんこう、卒業以来の再会者も相当あって三時間以上に渡って歓談、散会は午後十時に近かった。席上次の申し合わせをした。来年は卒業後廿五周年に当るので恩師を御招きして盛大なクラス会を開く、期日及び場所は、なるべく多数集れる点を考慮して、五月中旬、東京というところで、一応、共振会(昭一六、三卒生)東京グループの帳面を田中が引継ぎ、その連絡係りをする事になった。共振会員諸君、来年の事を決めるとは鬼が笑うなんていわないで、今から予定して必ず出席なさるよう誌上をかりて御願いと同時に御希望、アイデア、ア

ドバイス等、広く洛友会員全員の皆様から田中に御寄せ下されば幸甚です。(田中(東京農工大)記)



三十七年度卒業生 第一回クラス会

昭和三十七年度電気電子卒業生の第一回クラス会が昭和三十九年十一月二十二日京都河原町のアサヒビヤホールで開催された。前田憲一先生を囲んで、東は東京、北は奥只見、西は九州からの友人三十数人が三年振りの再会を喜びあった。先生から学校の近況を聞き、更に各人の近況を話し合っているうちに、三時間はまたたく間に去ってしまった。しかしこの三時間の語りいで、年度の頃以上の親密さが増した感じがし、将来三年(三)にこの同窓会を開くことを約束して解散したが、惜別を哀

島津製作所洛友会

新春の一月十八日夕、南禅寺の料亭「菊水」にて、島養先生の勲一等瑞宝章受賞をお祝いするとともに、上西副社長(昭6)の藍綬褒賞受賞、金森君(昭30)の工学博士取得と重なる慶事を記念し、加えて福田君(昭28)の国際分光学会(ピッパーク)出席の壮行を祝して会合を催した。林(重)先生、大谷先生の御出席を得て、出席者は二十名の盛会であった。

島養先生はじめ三氏に対して会員一同よりさやかな記念品を呈した後、いろいろと感興深いお話を拝聴し、広々とした庭園を眺めながら歓談の時を忘れた。宴たけなわに舞妓さんの京の四季など日本舞踊あり、最後に大谷先生のスライドを見せていただき、冬の夜も短かく感ぜられた一夕であった。(伊藤記)

